

第36回高エネルギー加速器研究機構経営協議会議事要録

日 時 平成25年6月12日（水）10時30分～12時50分

場 所 KKRホテル東京11階「白鳥の間」

出席者 潮田、小谷、新竹、瀧澤、武田、西島、深澤 各委員
鈴木（厚）、野村、岡田、峠、山内、山田、生出、伴、清家 各委員
（欠席者 佐藤、高畑、福山、齊藤 各委員）

陪席者 住吉理事、岩崎監事、磯部監事、塩原総務部長、片田財務部長、篠原研究協力部長、大山施設部長、池田参事役、勝田総務課長、櫻井企画課長、藤川主計課長、安田施設企画課長

配付資料

1. 第4期高エネルギー加速器研究機構経営協議会名簿
2. 第35回高エネルギー加速器研究機構経営協議会議事録
3. 平成26年度概算要求について
4. 平成24事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
5. 平成24年度財務諸表及び決算報告書について
6. 平成24年度事業報告書について
7. Belle 実験データの一部消失について
8. J-PARC ハドロン実験施設における事故について

席上配付資料

- ・J-PARC ハドロン実験施設における放射性物質の漏洩と被ばく事故について

議事に先立ち、鈴木議長から開会の挨拶があった後、資料1に基づき、新たに瀧澤美奈子氏（科学ジャーナリスト）が委員となった旨の説明があり、また、鈴木委員（前日本原子力研究開発機構理事長）が5月17日付けで辞任された旨の報告があった。

議 事

1. 議事要録

鈴木議長から、資料2に基づき、第35回議事要録については、既に電子メールで確認及び了承いただいたとおりである旨の説明があった。

2. 審議事項

(1) 平成 26 年度概算要求について

野村委員から、資料 3 に基づき、平成 26 年度概算要求について説明があり、審議の結果、了承された。

(2) 平成 24 事業年度に係る業務の実績に関する報告書について

峠委員から、資料 4 に基づき、平成 24 事業年度に係る業務の実績に関する報告書について説明があり、審議の結果、了承された。なお、審議の過程で以下のとおり質疑応答があった。

[○：委員からの主な意見・質問、→：機構側からの回答]

○大型低温重力波望遠鏡（KAGRA）は、文部科学省の最先端研究基盤事業として時限的に開始されたプロジェクトだが、現在の進捗状況と今後の予算的課題について報告願いたい。

→当初の事業予算には、トンネル掘削等費用が含まれておらず、東京大学が負担して作業を進めている。しかし、掘削中に湧水が発生したため、その処理に追われて若干計画が遅れているのが現状である。望遠鏡本体については予定どおり建設が進んでいる。

○施設利用による自己収入の前年度増加分 470 万円は何によるものか。

→国のプロジェクトで既に学術審査を経て採択された課題について利用料を徴収のうえ優先的に利用させる「優先利用制度」によるものである。なお、民間企業については、別の枠組みで有償利用している。

○自己収入を示す場合、資料として総額を示したうえで、対前年度比の増額分がその程度かを示したほうが分かりやすい。

○国が実施する「革新的イノベーション創出プログラム（COI）」について、KEK としてはどのような計画を考えているか。

→「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」での考え方をベースにして現在検討中である。

→DESY や SLAC など海外研究機関からコラボレーションの要求が多々あるものの、一方でマンパワーの問題に直面している。今後は、「革新的イノベーション創出プログラム（COI）」の予算獲得に向けて努力するとともに、インフラ整備に携わる人員も含めたマンパワーの確保についても考えていきたい。

○研究力促進のためのプログラムも必要だが、それとは別に、各大学と各大学共同利用機関における人材交流やキャリアパスに着目した予算の割り当ても必要と考えており、国に期待したい。

(3) 平成 24 年度財務諸表及び決算報告書について

清家委員から、資料 5 に基づき、平成 24 年度財務諸表及び決算報告書について説明

があり、審議の結果、了承された。

(4) 平成 24 年度事業報告書について

清家委員から、資料 6 に基づき、平成 24 年度事業報告書について説明があり、審議の結果、了承された。

3. 報告事項

(1) Belle 実験データの一部消失について

峠委員から、資料 7 に基づき、Belle 実験データの一部消失に係る検証経緯及び答申結果等について報告があった。なお、報告の過程で以下のとおり質疑応答があった。

[○：委員からの主な意見・質問、→：機構側からの回答]

○答申を踏まえた設備の整備を行うことで、今回のようなヒューマンエラーが発生した時にデータ消失の防止は可能なのか。

→データ消失の再発防止は、設備の整備だけではなくヒューマンファクターも含めて総合的に取り組まなければならないと考えている。

○B 計算機で使用した磁気テープを KEK で保管していたわけではないのか。

→磁気テープは業者からの借用品であり、データを磁気ディスクにコピーして業者に返却したが、あとで気付いたときには既に消去されていた。

○このような事故が発生した背景には、時間的にタイトであったこと、また、予算的制約があったことなども考えられるが、コミュニケーション不足により一連のデータ移行作業に対する俯瞰的な視点が欠けていたことが主たる原因と考えられる。

○データ消失により機構の名誉や信用を著しく失墜させたという見方も可能だが、最終的に関係者の処分等は行わなかったのか。

→検証委員会の答申を踏まえて、KEK としては、関係者へ注意喚起等を行った。

→検証委員会からは、プロジェクト管理について系統的な取り組みが必要であるとの重要な指摘を受けた。すなわち、プロジェクト全体を俯瞰する現場監督者と、各プロジェクトのタスク管理を行う現場責任者との間で作業計画、進捗管理、作業クオリティの把握が可能となる体制を構築すべきとのことであった。これについては、今後、具体化に向けて検討していく予定である。

(2) J-PARC ハドロン実験施設における事故について [自由討論]

鈴木議長及び住吉理事から、資料 8 及び席上配付資料に基づき、5 月 23 日に発生した J-PARC ハドロン実験施設における事故について現状報告及び謝罪があった。なお、報告の過程で以下のとおり質疑応答があった。

[○：委員からの主な意見・質問、→：機構側からの回答]

○試行して初めて結果が分かるような実験では、想定外の事象が起こることもあるが、J-PARC においても今回のような事故が起こる可能性は考えられなかったか。

→大電流が流れたときに放射性物質が大量に発生することはあまり認識しておらず、
当時は現場対応者の知識と経験の範囲内で対処した。例えば、かつてアメリカで起きた類似のケースなどを関係者が共通認識していれば、もう少し違った対応を取ることは可能であったと考えている。

○今回の事故は大いに反省し対策を検討する一方で、今後も最良の実験を遂行するためには過度に慎重になりすぎてはならないことにも配慮されたい。

→今回の被ばくに係る対応の遅れは、ビーム取出し装置の誤作動を確認した時点で、
ビーム供給を停止して全員退避させるなどのマニュアルを整備していれば内部被ばくは避けることができたと考えている。

○事前の防止マニュアルだけでなく、事後の対応マニュアルも非常に重要である。また、コミュニケーションのあり方も考えなければならない。

○事故対応の遅れは、組織的な要因もあるのではないか。J-PARC には法人格がないため、何かを決定するにしても KEK と JAEA の合意が必要となる。この点については非常に問題を感じるが、このような状況を改善していく必要はないのか。

→難しい面もあるが、できることから考えていきたい。

○大学院生も被ばくしているが、その後どのようなケアを行ったのか。

→事故発生後に大学院生、保護者、学長等大学関係者に謝罪して、また、大学院生には電離放射線健康診断を実施するとともに、1 か月後には血液検査も実施する予定である。外国人研究者に対しても同様にケアを行う予定である。

○J-PARC の運転は休止しているのか。

→現在は休止中であり、国に対して納得のいく再発防止策を提示しなければ再稼動することは難しいため、つくばキャンパスも含めた事故防止対策を慎重に検討していく予定である。

5. その他

- (1) 次回経営協議会については、事務局からあらためて日程調整の連絡をすることになった。

以上